

『コロナ禍における COVID-19 の知識を取り入れた学内での統合実習』について

藍野大学短期大学部 第一看護学科 山本かよ子 渡辺史子

藍野大学短期大学部は、育成する人材像をディプロマ・ポリシーで定め、その目標を達成するために教育課程を編成しています。また、学修効果を高めるために、アクティブ・ラーニングなどの教育方法を積極的に取り入れ、2年課程のタイトなカリキュラムで看護師国家試験に挑める力を育むために教員は日夜、学生と向き合っています。

2020年度から新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大の影響を受け、教育体制が一変しました。学内においても感染予防対策を行いながら、シミュレーション教育の強化をはかり、対面授業ができない状況の時には遠隔授業を取り入れ、必要な教育内容を教授し、教育水準の維持に努めました。臨地実習においては、学生が病院内に立ち入ることによる患者さんへの影響を鑑み、臨地実習先の病院からは学生受け入れ辞退の要請が相次ぎました。看護基礎教育における臨地実習が学内実習に切り替えられることによる実践能力の低下が懸念されるなかで卒業し就職していく学生たちは、COVID-19患者への看護に携わる可能性は高いことが予想されます。

私たち教員は、その場面において学生が自らの感染を予防するための知識や技術はもちろんのこと、隔離という特殊な状況に置かれた患者の安全と安楽を守る責任ある立場に立つ看護師になるために、メディアからの断片的な情報だけでなく、専門的な知識と技術を身につけて準備をしておく必要があると考えました。

そして、私たち教員2人は、2020年8月に実施された大阪府と大阪府看護協会主催による「新型コロナウイルス感染症患者（重症患者）対応の看護従事者人材育成研修」（以下コロナ重症者研修）において所定の課程を修了しました。

本学では、2020年12月に予定されていた統合実習が臨地で行えず、学内実習としての内容を全8日間計画しました。そのうち2日間は、コロナ重症者研修の内容を基にCOVID-19の知識を取り入れた学内実習を行いました。本書では、コロナ禍における学内での統合実習の教育実践を報告しています。ここで紹介する「統合実習」は、2年間の学びの集大成となる必須科目であり、多様なニーズに対応できる能力を養う重要な実習です。

世界にパンデミックをもたらしたCOVID-19は、我々がこれまで経験したことがない新たな感染症であり、臨床現場では、ひっ迫している状況の中、最新の知見を得ながら対応策を講じているところです。看護基礎教育は、学生をひとりの人間として成長させるだけでなく、卒業後に臨床で働く看護の専門職者を育てるという責任があり、卒業後の長期的な目標に向けた内容や方法を考慮する必要があります。

私たち教員は、今後も社会的危機による医療体制の変化、ならびに看護基礎教育の変化から実態を把握し、新たな看護基礎教育のあり方を見出していく所存です。実習の詳細は、日総研出版『看護人材育成』6・7月号をご覧くださいと幸いです。